

### \* 天文時計「山下時計」収蔵

天文台を来訪中だった三鷹光器会長の中村義一氏から「山下時計」を譲ると電話をいただいた。この山下時計は、東京大学天文学教室が捨てようとしていたのでもらい受け、修理して動くようにしたというのである。「山下時計」は古い東京天文台職員なら知らないものはないという天文時計である。筆者は昭和36年(1961年)に岡山天体物理観測所に就職した。その頃、岡山天体物理観測所には2台の「山下時計」があった。1台は74吋反射望遠鏡室のコントロールデスクの左斜め後ろにあった。もう1台は36吋光電赤道儀望遠鏡のコントロールデスクの右後ろにあった。こう書くと74インチと36インチでコントロールデスクの左右逆のあったように読めるが、74吋望遠鏡のコントロールデスクは操作面が望遠鏡を向いており、36吋望遠鏡は操作面が望遠鏡を背にして配置されていたのである。

5月22日、電話でこれからお伺いすると連絡してから「山下時計」をいただてきた。中村会長は食堂の机の上に工具で工夫して時計をセットして動かしていた。天文台に持ち帰ってもすぐには運転できなかつた。時計の箱がない裸の状態であったから、まずは時計をぶら下げる工夫をしなければならぬので、暫く机の上においていた(写真1)。



写真1 天文台の机の上の山下時計

この時計は、振り子時計なので水平垂直をきちんとできる細工をしなければならない。箱がない裸の状態なので、観測所で使っていたように木箱を作ろうかと思ったが、それも簡

単ではない。そこでまたぞろ、廃棄物の中でうまく使えるものはないかと物色して、これと思うようなものに出くわすまでに数日を要した。

これと定めたものは工具棚の一部と思われるものであったが、臨時に時計を設置することが出来そうなので、簡単な図面を書いて工場に相談に行った。岡田さんは快く引き受けてくれ、明日9時半頃から作業しようということになった。

アングル材に穴を4個開け、台に使う工具棚の一部に2個の穴を開けるだけのことだが、それなりの寸法取り、工作が必要で、見ているまに岡田さんが細工をしてくれて、時計をセットする事が出来、時計は時を刻み始めた（写真2）。

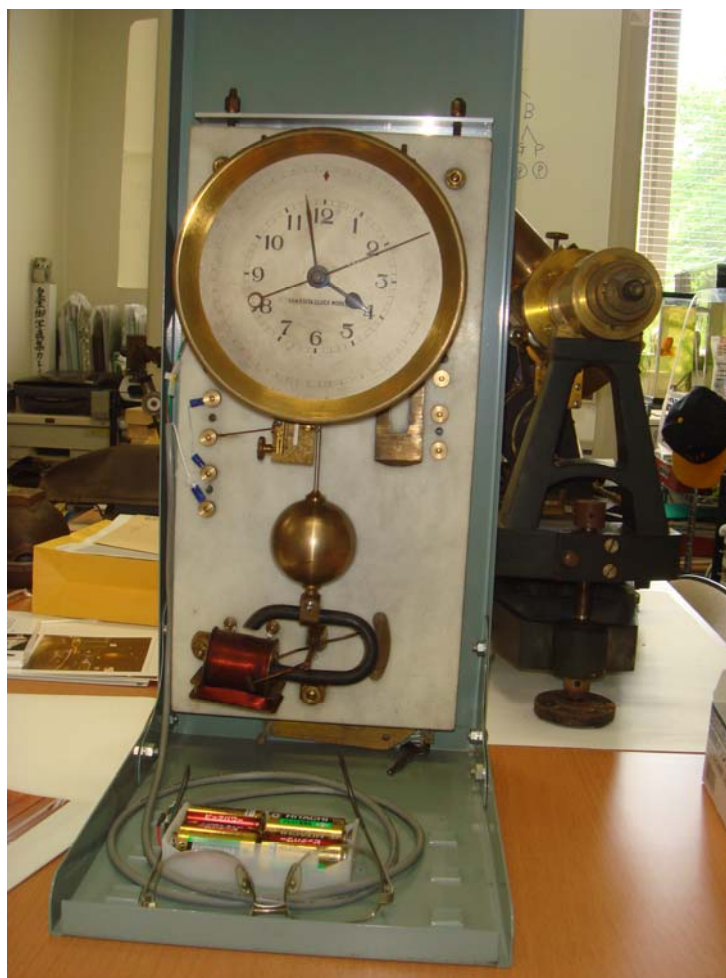


写真2 時を刻み始めた山下時計

筆者の岡山天体物理観測所での最初の仕事がこの「山下時計」での保時作業であった。まず、16時の時報のときの36吋望遠鏡ドームの山下時計の表示を0.1秒まで読み、17時の時報のときに74吋望遠鏡ドームの山下時計の表示を読むのである。その作業を毎日続け、2つの時計の進み具合、遅れ具合の24時間辺りの値を求めて、観測時の正確な時刻を知る方法が取られていたのである。その頃は1/10秒までで十分であった。この時計の時刻にうるさかったのは、彗星などの直接写真を撮っていた富田弘一郎氏であった。他の人は、ファイナダーで星を確認するので、それほどうるさくはなかった。

業務として、保時、報時をやっていた人たちはすでにこの頃は原子時計を使っていたが、望遠鏡ドームには天文時計としてこの「山下時計」が置かれていた。この山下時計はコイルを巻いた電磁石をON、OFFすることで振子の下の鉄心を振らせていた。「山下時計」は通常は「恒星時」を表示するようになっていた。筆者にとっては懐かしい時計である。

東京天文台の各ドーム、測定室、実験室に保時室から分秒信号が届くようになったのは、昭和41年に本館（北研究棟）が完成した以降のことであった。

写真3は「山下時計」を表す名盤である。

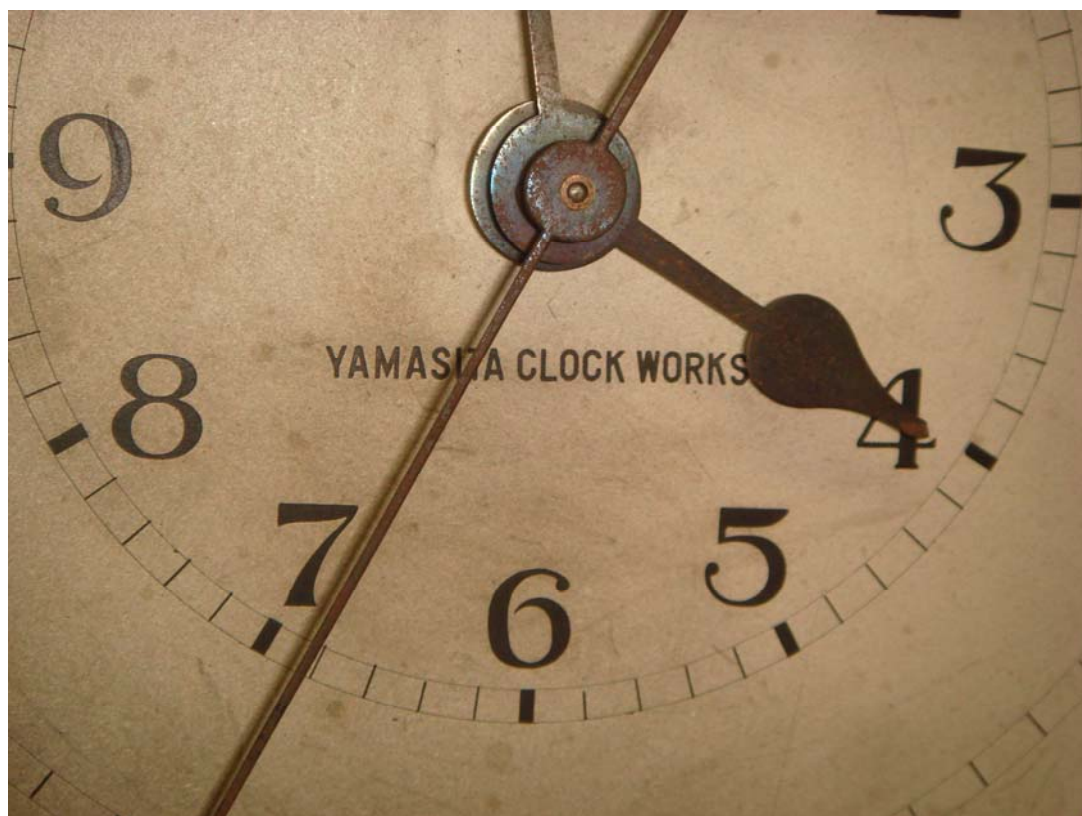


写真3 YAMASHITA CLOCK WORKSの名盤

この山下時計は、自動光電子午環（PMC）棟の回収が終わったら、展示の予定である。